

# 日本の歌曲（歌唱共通教材）へのアプローチ

— 歌唱共通教材の背景・教材解釈・働きかけ —

戎谷和修

(附属光中学校)

An Approach to Japanese Songs  
as Common Teaching Materials for Singing

— the Way of Understanding the Common Teaching Materials  
for Singing and Proceeding the Class —

Kazunobu Ebisutani

(Received November 30, 1992)

キーワード：資料、教材解釈、教師の働きかけ

## 1 はじめに

音楽の時間が実質削減されていく状況の中、音楽科が教科として存続できないのではないかという危機感をもつ。音楽科が教科として存続してほしいと願う。教科として存続するために、教師は次の2つの事項に取り組みたい。

- ① 音楽の時間が、心情、感性、情操等を育み人間形成に有用であるという認識を、多くの人に認めさせる。したがって、教師は、今まで以上に1時間1時間の音楽の授業を、人間形成に役立ち、大切であるという意識を自他ともに認めさせる授業にしなければならない。音楽の時間が真に人間形成に必要なだという成果を修めなければならない。
- ② 音楽教育の現状に対する認識と解決方法に対する見識を教師がもち、授業レベルで実践する。教師は、まず、生徒の将来の生き方や在り方とかかわって、音楽の時間が生徒の成長にどのように貢献できるかを明確にしなければならない。そして、音楽の時間に何を教材として取り上げ、どのような学力（知識、技能、感覚、心情、興味・関心、価値感等）を、つけさせようとしているのかを、真剣に考えなければならない。

このことには、音楽の授業はもとより、部活動、クラブ活動、全校合唱、合唱コンクール等、すべての場面で取り組む必要がある。これらの取り組みによって、音楽科の存在価値

値が認められ、時間を確保できるのである。

そして、生徒に様々な感動体験を与えたり、あらゆるジャンルの音楽をじっくり表現させたり、鑑賞させたりして、音楽科のねらう音楽性とともにも音楽を愛好する心情、鋭い感性、豊かな情操を備えた人間の育成につなげることができるのである。

## 2 日本の歌曲（歌唱共通教材）に取り組む意義およびその方法

### (1) なぜ、日本歌曲なのか

共通歌唱教材を取り上げて研究実践を進める。

それは、共通教材として、全国の学校で、かなりの時間をさいて指導するこれらの作品の指導時間の在り方が、音楽科全体の中で、時間的にも内容的に重要な部分を占めるにもかかわらず、おろそかにされてきたからである。

また、生徒の好悪にかかわらず文化的価値のあるものを取り上げ、妥協せずに指導する。共通教材に取り上げられた日本の歌曲にひたらせ、味わわせることによって、日本歌曲の魅力とともに、文化とその文化の裏にある日本人の心、そんな文化を持つ日本人としてのほこりを、生徒に感じとらせることができるからである。その他、次のような理由がある。

- 個人的に作品を十分に理解することができなかった。どのように作品を教材解釈し、どのように教えたらよいか困っていた。
- 同様に、若い教師からも、困っているという声を数多く聞いた。

特に、私は、これらの作品に、次のような願いをもち、次のように取り組みたいと考える。

- ① 文化遺産ともいえるこれらの作品を伝承したい。日本人のもつ美意識や心を生徒に伝えたい。そのために、これらの曲の魅力や魅力の秘密を生徒に深く感じとらせる場を授業展開の中で仕組む。
- ② 老若男女が世代を越えて、ともに歌い合えるような音楽的風土をつくりたい。また、うれしいとき、悲しいとき、生活の様々な場で愛唱歌を口ずさむ人間に育ててほしい。  
そのために、共通教材として誰もが学習するこれらの曲を、誰もが暗唱できるように生徒に心ゆくまで歌い込ませる。歌い込ませることにより、更に曲の魅力を豊かに感じとらせていく。

### (2) 歌唱共通教材とは

中学校音楽科表現の領域には1年生3曲、2年生3曲、3年生2曲、合計8曲の共通教材がある。1年生が「さくらさくら」「花の街」「赤とんぼ」、2年生が「夏の思い出」「荒城の月」「浜辺の歌」、3年生が「花」「早春賦」である。これらの8曲は全て日本

の歌曲である。

昨年流行した歌が今年には忘れられる時代に、これらの曲は少なくとも40年以上の歳月にわたり、愛唱され続けている。それは、「旋律が魅力的でふと口ずさみたくなる」「形が整っていてわかりやすい」「歌詞の抑揚が旋律に上手に表現されていて歌いやすい」「歌詞の内容に、ふとやすらぎを感じる」等、歴史の淘汰に耐えられる多くの優れた面や日本人の心に響く何かをもっているからである。

### (3) 日本の歌曲に対する生徒の取り組み

生徒は日本歌曲の良さを感覚的に理解している。教師が心を込めて伴奏すると、生徒は自然に歌い出す。それは、曲の情感を感じとり、自分自身に語りかける感じである。それは、マスメディアから流れた刺激の強い音楽に親しみ、歌うときの表情とは異なっている。合唱コンクール等で大規模な合唱作品を意欲的に歌うときの表情とも異なっている。大声を張り上げて歌ってはいないが、多くの生徒は、確かに日本歌曲の良さを素直に感じとっている。

しかし、多くの生徒は、見かけが単純で、自然で、刺激の少ないこれらの作品の良さをなかなか認めようとはしない。「2時間もかけて、中学校で学ぶ価値があるのか。」等と、これらの曲を馬鹿にする者さえもいる。

### (4) 日本歌曲に対する教師の実態

ただ歌わせるだけなら、指導は簡単である。しかし、これらの作品の指導を通して、生徒に作品の魅力や魅力の秘密を感じとらせることは容易ではない。それは、教師自身が作品の魅力とその魅力の分析を十分にしていないことに主な原因がある。私自身も若い頃は作品の良さが理解できず、「おもしろくない。なぜ、こんな曲を教えなければならないか。」等と、考えていた。それは作品が一見単純であり、自然であり、あまりにも身近すぎてなかなか魅力を感じとることができなかつたからであり。感じとることができても、魅力の要因を分析することができなかつたからである。したがって、「昔からある良い曲だから、しっかり歌おう。」と言って、ただ歌わせただけの授業に終わっていた。どちらかという手持ち余しぎみであった。

### (5) 日本の歌曲の魅力を生徒に主体的に追究させるための教師の取り組み

愛唱歌として歌い続けてほしい等の願いを授業で実現するには、まず、作品の魅力が教師自身が感じとる必要がある。そこで、私は、次の3つの事項に取り組んだ。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>① 文献を収集し、作詞者、作曲者が何をどのように考えて創作したか、その背景を知る</li><li>② 歌詞を見直し、可能な限り言葉からイメージを広げる努力をする</li><li>③ なぜ、こんなにも長い年月愛唱され続けているかという視点で作品の魅力进行分析する</li></ol> |
|--|

① 文献を収集し、作詞者、作曲者が何をどのように考えて創作したか、その背景を知る

作品の背景を調べることは、大変な作業である。たくさんの文献にあたっても、日々の授業に参考になるものは多くない。しかし、『「荒城の月」は会津の鶴ヶ城がモデルだったのか。それなら2番の歌詞がわかったぞ。』等と「目から鱗がとれる」ような文献に出会ったときは、本当に感動する。作品の背景を調べることは、教材理解、教材解釈・発問づくり等に役立ち、授業展開の中で、生徒の様々な疑問や発言に自信をもって対応できることにつながる。

② 歌詞を見直し、可能な限り言葉からイメージを広げる努力をする

詩の解釈が目的ではない。教師は、題材や歌詞から、自由なイメージをできるだけ多くふくらませ、表現への手がかりとしたい。教師が歌詞から様々なことをイメージできることは、教材解釈に役立ち、授業展開の中で生徒を生かすことにつながる。

授業で歌詞を取り上げるにあたっては、つぎの事項に留意する必要がある。

- 正解を求めない、時間をかけすぎない、生徒の自由な発想を尊重する等。
- 愛唱歌として生涯、生活の場で口ずさむことを目的とする立場から、生徒が作品を愛唱する契機となるように、歌詞の面からも深く印象づける。

③ なぜ、こんなにも長い年月愛唱され続けているかという視点で作品の魅力进行分析する

教材をアナリーゼし、この作品の本質は何か、どこに作品の特徴があるか、良さは何かを調べることは、授業をする教師にとって当たり前のことである。ここでは、なぜ、長い年月愛唱され続けたかという視点で教材解釈をしたい。

授業展開場面では、将来、愛唱歌になってほしいという生活化の観点から、次の事項に留意して授業を進める。

- 作品で一番好きな箇所や気になる箇所を発表させ、その根拠を尋ねたり、それを全体で検討する場を設定したりすることにより、生徒一人ひとりに作品の魅力を感じとらせる。なぜならば、生徒一人ひとりがもつことのできるイメージや理解は限られているが、それらを出し合うことで豊かなイメージや理解が得られると考えるからである。
- 次のような課題を設定し、課題解決学習的な方法で歌唱共通教材全曲に取り組みさせる。「この作品は長い年月日本人に愛唱され続けている。どんな魅力がこの作品に隠されているのだろうか。」これは、生徒が、自由な雰囲気の中で作品の良さを感じとり、歌唱表現してほしいからである。また、作品の良さを理解し、作品のイメージを育み、そのイメージを納得のいくように演奏するという音楽表現の追究の方法を体得してほしいからである。
- 生徒が感じとった作品の魅力を表現に生かせるようにアドバイスしながら、歌い込ませ、歌い込むことによって初めてわかる作品の魅力を感じとらせる。このことは、生徒のさらに深い理解と愛情とともに曲を自然に口ずさむというような音楽の生活化につながっていく。

## 2 さくらさくら

はじめに

さくらさくら

The musical score is written for five staves, labeled A, B, B, A, and C. It is in treble clef and common time (C). The first staff (A) begins with a mezzo-forte (mf) dynamic. The second staff (B) begins with mezzo-piano (mp). The third staff (B) also begins with mezzo-piano (mp). The fourth staff (A) begins with forte (f). The fifth staff (C) begins with piano (p). The score includes various musical notations such as eighth notes, quarter notes, and rests, and concludes with a double bar line.

歌い終わった後、一瞬の沈黙があり、拍手が起こった。

この場面で、教師は次のように生徒の肯定的な面を見つけ、評価した。「男女が交互に歌うことにより繰り返しを上手に表現できたね。特に、“いざやいざや”のクレッシェンドと最後の“見に行かん”のところの終わり方には感動しました。私も『さくらさくら』が厳粛な曲だということ、君達の演奏を聴いて、改めて感じました。」「一瞬の沈黙があって、拍手がでたね。これは各班とも互いに意見を出し合いながら協力して練習ができたからであり、また、学級全体が演奏を真剣に聴き、演奏する人と聴く人の心が通じあった証拠だと思います。本当に素晴らしいことだね。」

これは、生徒が歌詞の内容を学習したり、箏曲によって鑑賞したりしながら作品の魅力を感じとり、合唱で表現したときのある班の表現記号と発表の様子である。「さくらさくら」の旋律の優雅さや厳粛さを、旋律のまとまりの繰り返し（3部分形式A B B A C）に着目し、表情をつけて見事に歌っていた。

「さくらさくら」は日本中の誰もが知っており、誰もが、一度は口ずさんだことがある。いつも、どこかで、誰かが、歌っている。また、前例のように、様々な工夫を加えると、技術や努力や要求に応じてくれるやりがいのある曲でもある。私も、短くて単純な曲がこのように人の心をとらえることができたということに非常に感動した。

### (1) 作品の背景

日本の唱歌（上）明治篇金田一春彦・安西愛子編、講談社文庫には、この作品について、次のように書かれている。

箏曲で「姫松小松」の次ぐらいに習う入門曲。平野健次氏によると、江戸時代は、「さいた桜」という題の歌で、

咲いたさくら  
花見て戻る 吉野はさくら  
竜田はもみじ 唐崎の松  
ときわ ときわ 深緑

という欲張った内容だったものを、『箏曲集』の編者が、すっきりしたものに改めたと言う。平和な日本の風景と、しとやかな日本女性を思い浮かべさせる美しい曲である。團伊玖磨氏は、この曲が日本の古謡に珍しいA B B A Cという整った形式をもっている点を賛美している。海外進出した日本歌曲の一つで「荒城の月」と並んで日本人と見ると、外国の楽士が演奏する曲目である。プッチーニの「蝶々夫人」の第1幕に使われているが、そんなことから有名になったものであろうか。

平野健次氏は、日本人の心の故郷を思い出させるような懐かしい曲として子どもの時からの愛唱歌としていたと言い、砂原美智子氏は、明治期の日本の唱歌のベストファイブの中に入れていいる。・・・中略・・・

箏曲集 明治二十一年、編集者が文部省（音楽取調掛）、発行者が東京音楽学校というややこしい本である。音楽取調掛では在来の邦楽歌詞が非教育的なので、これをまじめなものにしようと、まず最も手を付けやすい箏曲をねらって一往目的を果たしたのがこの本である。

平野健次氏によると、有名な「姫松小松」の歌詞もこの時に出来たので、これまでは、『糸竹初心集』以来の「岡崎女郎衆岡崎女郎衆」という文句であった。この『箏曲集』のかかりは、伊沢修二を長に、里見義・加部巖夫の三人だったので「さくら」の歌詞を作ったのは、このうちの誰かだろうと言うことになる。・・・後略・・・

また、この作品について團伊玖磨氏は著書「好きな歌・嫌いな歌」読売新聞社の中で、次のように述べている。

古謡に江戸の都節が影響して、箏唄となったといわれる「さくら さくら」は、日本俗楽の陰旋法としては、珍らしく暗くじめじめした感じを持っていない。そしてこの歌は短かいながら何よりも、整然とした形式美を持っている。

“さくらさくら”と“いざやいざや”の同じ音型に挟まれる“やよいのそらはみわたすかぎり”と“かすみかくもかにおいぞいづる”は、全く同じ音型の繰り返しである。そして、“みにゆかん”の結尾がつく。

A B B A Cのこの形には、日本の古謡にはほとんど見られない、三部分形式の旋律構造への夜明けが感じとれる。

優れた形の美。じめじめしない陰旋法。この歌が残ってきた理由がここにある。「さくら さくら」はプッチーニの『蝶々夫人』の第一幕にも使われている。この歌のよさを、プッチーニも理解したからだろう。・・・中略・・・

節というものは、流れの美しさと同時に形がものをいう。残るものは、みな形の良い節なのである。

西洋の音楽は、形を追って数百年の間、花を咲かせてきた。形の大切さ。同じことが日本古謡にいえることは、今更ながら深い示唆を与えてくれる。

中学校指導書音楽編（文部省）には、次のように書かれてる。

この曲が小学校4年生の共通教材でもあることを踏まえ、中学校における合唱の経験を通して、充実した響きの中で、詩情豊かに表現させることに留意する必要がある。なお、リコーダーによる演奏や箏曲などの鑑賞を取り入れるなど、より幅広い取扱い方についても配慮したい。

また、1990年の教育課程講習会（中国・四国ブロック）で、文部省初等中等教育局教科調査官の塩野勇記氏はこの曲を共通教材に取り上げた理由について次のように述べられた。

「荒城の月」とともに外国に一番良く知られた曲である。国際化の時代、外国に行く機会も多くなる。そこでは、パーティもあるであろう。そんなとき、誰もが知っていて、日本人ならすぐに合唱できる曲が必要ではないか。

私もまったく同感である。しかし、気になることがある。それは、教科書会社によって編曲が違うということと伴奏が違うということである。個人的な考えだが、パーティで合唱するには同じ編曲でなければならないだろう。また、ピアノのない場所で歌わなければならないこともあるので、無伴奏でも歌える編曲にするほうが望ましい。この作品は5音音階でできており、様々な編曲で学習した人が一度に歌っても合ってしまうといえなくもないが、やはり、「花」のように、日本中の人と同じ編曲で覚えており、それが自然に合唱になっていく方が、「さくらさくら」が合唱曲として生活の中で親しまれるためには必要ではなからうか。

無伴奏でやさしく編曲したもの、しかも、それは教科書会社によって違うのでなく全国共通な編曲の登場が待たれる。

「さくらさくら」については「好きな歌・嫌いな歌」團伊玖磨 読売新聞社。「日本の唱歌（上）明治篇」金田一春彦・安西愛子等の本が出版されている。

Favorite Songs Taught in Japanese Schools (Essay and Translations by Itiro Nakano) The Japan Times (日本語で「日本の古い歌」とでも訳すのか) (arranged by Masaru Ukon) に記載されている英語の歌詞も参考までに載せておく。

Sakura Sakura

Sakura Sakura

Shining bright in sunny March,

Spreading over hill and dale,

Blooming graceful and peaceful

Like an angel's silken veil,

Sakura Sakura

How I love to see them !

## (2) 「さくらさくら」の歌詞を考える

### 1 番

さくら さくら  
野山も里も 見わたす限り  
かすみか雲か 朝日ににおう  
さくら さくら 花盛り

### 2 番

さくら さくら  
弥生の空は 見渡す限り  
かすみか雲か においぞいずる  
いざや いざや 見に行かん

今までに何度となく聞き、親しんできたので、この作品についてはよく理解しているつもりでいた。しかし、改めて考えると、歌詞の内容について時間をとって考えたこともないし、また、考えてもイメージがなかなかふくらんでこなかった。当然、「生徒に何を訴えたらよいか」等、具体的な働きかけもわかっていなかった。今も、十分に理解したとはいえないが、私なりに感じたり、想像したりしたことを書いてみる。

### 1 番

さくらが野山にも里にも見わたす限り咲いている。その咲いている様子はちょうど春の風景一面を幻想的に包んでいる霞や雲のようにも見える。また、霞や雲が実際に野や山をおおっているようにも見える。春爛漫、さくらの花と春の風景が織りなす幻想的な光景である。朝の光によって照らし出されたその眺めは、実際には匂うはずがないさくらの花の香りが漂ってくるように感じられてくるほどに鮮やかなのである。

### 2 番

さくらの花が咲いている。3月の空を見渡すかぎりおおっている。その情景は、さくら、霞、雲の境目がなく、独特の幻想的な雰囲気さえも感じさせてくれる。私たち日本人はさくらが昔から好きである。さくらという言葉に、各人各様、いろいろな思いを持っている。

この作品は、プッチーニの歌劇「蝶々夫人」の華やかな舞台を連想させる。また、桜の花が今を盛りと咲き、風に花びらが散る様子や着飾った女の人が琴を奏でたり、踊ったりする様子を連想させる。

1番同様に、桜の花やそれを含んだ春の風景の鮮やかな様子や桜の咲き誇るあでやかな雰囲気が「匂いぞ出ずる」によく表現されている。

「いざや いざや 見にゆかん」の「さあさあ見に行こう。」に、花見好きな日本人の気持ちがよく表わされており、これが、「さくらさくら」の親しまれる理由の一つであろう。

## (3) この曲が親しまれている理由

- この曲が親しまれている理由はいろいろ考えられるが、まず、第一番には旋律が美しいということがあげられる。

☆ この曲は、伴奏なし、対旋律なし、ただ旋律を斉唱するだけで満足できる数少ない



や雲のように見えるのか。」または、「霞や雲が3月の空をおおっているのか。』』、と問いかけたり、『「桜には匂いはないのに、匂いぞいずると書かれているのはなぜか。桜の花がどのように咲いている情景を想像するか。』』等と限定して問いかけたりして情景を豊かに想像させる。

- 将来、この歌がいろいろな集会・パーティ等、生活の中で世代を越えて合唱されるようになるように、2部合唱、無伴奏で何回も歌わせ、覚え込ませる。

時間に余裕があれば、小集団で、この曲にふさわしい対旋律を、5つの音を組み合わせながらつくらせたり、旋律にふさわしい伴奏をさがさせたりしながら歌唱表現を工夫させる。なぜなら、このことが生徒の曲に対する思わぬ魅力の発見やその感受につながっていくからである。

楽器はリコーダーを使用させる。コンピュータを使用するのもおもしろく、効果的である。

### (5) 指導計画（3時間）

	学 習 内 容	主 眼	追究を支える手だて
1	○歌詞のおもしろさと歌唱表現の工夫 箏曲による鑑賞	○生徒一人ひとりが歌詞の情景をイメージすることができる。	○「桜の花には匂いがないのに“匂いぞいずる”と書かれているのはなぜか。桜の花がどのように咲いている情景を想像するか。』』等と、限定して問いかける。
2	○2部合唱の響きと歌唱表現の工夫	○作品の雰囲気にもふさわしい速度や雰囲気にもふさわしいバランスで、4度や5度を中心にした2部合唱の響きの美しさを味わうことができる。	○作品にもふさわしいテンポを探させたり、歌詞の雰囲気を歌唱表現に生かさせたりしながら、班別に合唱に取り組ませる。
3	○形式と表現の工夫	○旋律のまとまりを感じとり、旋律の繰り返しや旋律の音の高さなどをもとに、表情をつけて合唱することができる。	○10小節の中に、様々な旋律のまとまりの繰り返しがあることに気づかせ、それに、留意させて班ごとに表情を工夫させる。

## (6) 授業での主な取り組み

### ① 曲のイメージをつかむ

生徒に主体的に表現を追究させるには、作品のイメージを豊かに持たせることが大切である。

「さくらさくら」の歌詞はみんな知っているが、しかし、生徒にとってはかなり難解であり、歌詞の情景をイメージしたり、歌詞のよさを自ら感じとったりすることは簡単なことではないので、授業では、何度か歌唱練習をしたり、この曲を鑑賞したりした後、教師が歌詞を朗読し、生徒にこの作品の情景を彼らなりにイメージさせた後、次のように問いかけた。

「桜には匂いはないのに、匂いぞいずると書かれているのはなぜか。桜の花がどのように咲いている情景を想像するか。」

ほとんどの生徒は、「桜の咲き乱れる様子（雰囲気）をにおうと表現している。」と、答えた。生徒の発言をまとめると次のようになる。

- |   |   |
|---|---|
| <input type="radio"/> 桜の気品がにおう              | <input type="radio"/> 日本の春がにおう            |
| <input type="radio"/> 歴史的な雰囲気がにおう           | <input type="radio"/> 桜の風格がにおう            |
| <input type="radio"/> 桜の香りがただよっている          | <input type="radio"/> 暖かい春のひざしの中に咲き誇る桜の様子 |
| <input type="radio"/> 桜のあざやかな様子がおいとして表されている |   |

授業のはじめ、「小学校ですでに勉強したのに、今更、何を勉強するの。」といった様子を見せていた生徒たちも、この曲の魅力に気づきはじめた。そして、まだまだ未知の部分があるのではないかと考えはじめた。「まだ、どのような魅力をもっているか」もう一度、「さくらさくら」に取り組もうという意欲も生まれてきたように感じた。

### ② 旋律の繰り返しを歌唱表現に生かす

3時間目はこの作品の特徴である同じ旋律のまとまりが何回繰り返されているかを生徒に探させ、繰り返しや音の高さや形式感をもとに、班で表現の仕方を工夫させた。

具体的には、この曲には繰り返しが4つあることを生徒に探させ、その繰り返しをどのように表現に生かせるかを、まず、個人で表現記号を使いながら考えさせた。それを、班ごとに意見を出し合わせ、曲にふさわしい歌唱表現を班ごとに工夫させていった。

主眼は次の通りである。

- ① 各班とも、前次までに学習したこの曲のイメージや繰り返しをもとに、表現方法を考え、表情豊かに歌唱することができる。
- ② 友だちの発言や歌を自分の思いや考えと比べながら聴き、演奏の良さや改善点を発表することができる。

主眼を支えるものは次の4つである。

ア 「さくらさくら」の旋律の繰り返しがどのようにになっているか分かる。

(7) 指導過程

学習内容・目標	教師の働きかけ
1 「さくらさくら」の歌唱	①「さくらさくら」と「花の街」を歌わせる。
2 「さくらさくら」の形式の理解	② 2小節以上で繰り返されている旋律を捜させる。 A さくらさくら B 弥生の空は 見渡す限り B 霞か雲か においぞ いずる A いざやいざや C 見に行かん  ③ 団伊玖磨氏の考えた3部分形式の分け方をプリントの例から選ばせる。なぜ他の例では不都合なのか理由を尋ねる。
3 「さくらさくら」の歌唱表現の仕方	④ 2小節以上の旋律の繰り返しを意識しながら、強弱記号のみで表現を考えさせ、練習させる。  <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;">             AとA、BとBのように繰り返しを意識して強弱記号をつけなさい。一番大きくしたいところをfにして、それを生かすにはどうしたらいいかという立場で考えなさい。           </div>
4 班別発表	⑤各班に自分達の考えた強弱記号を歌で発表させる。まず、発表できる班を値打ちづける。次に、発表した班のよい点を発言できることを、最後に、他の班にアドバイスできることを値打ちづける。
5 仕上げの合唱と自己評価	⑥一つの班をモデルにして、その強弱方法で全員に歌わせる。
6 まとめ	⑦今日の学習を振り返らせる。

予想される生徒の反応	教師の対応
<p>① 気持ち良く歌うと思われる。「花の街」をなぜ歌うのかと思う生徒もいる。</p> <p>○ 何人かの生徒は2部合唱にしようとアルトのパートを歌うと思われる。</p> <p>② 「さくらさくら」と「いざやいざや」「弥生の空は」と「霞か雲か」「見渡す限り」と「匂いぞいずる」についてはすぐに発見できると思われる。だが、「霞か雲か匂いぞいずる」と「弥生の空は見渡す限り」についてはすぐには見つからないことも予想される。</p> <p>③ ほとんどの生徒が正解すると予想される。理由としては、言葉の続き具合いや旋律のまとまり具合をあげると予想される。</p> <p>④ ○ 「いざやいざや見に行かん」のところをfにする生徒が多いと思われるが、「さくらさくら」のところをfにする生徒も小数だがいると予想される。</p> <p>○ 強弱記号を班でつけることはすぐできると予想されるが、歌の練習は各班ともスムーズに行かないと思われる。</p> <p>⑤ ○ 歌で発表できる班が半分ぐらいあると思われる。</p> <p>○ 歌の強弱は、あまりつかない班と極端につく班とに分かれると思われる。</p> <p>○ かなりの生徒が視点をもって聴けると思われる。</p> <p>⑥ ○ 表情がかなりついた歌唱になると思われる。</p> <p>⑦ 自己評価カードに、各班の発表と作品の素晴らしさについて書くと思われる。</p>	<p>○ 素早く立つことを値打ちづける。</p> <p>○ 2部合唱にしようとした生徒や表情豊かに歌う生徒を値打ちづける。</p> <p>○ 班のみんなが協力して捜せることを値打ちづける。</p> <p>○ 班の全員が分かることを値うちづける。</p> <p>○ 「2小節にこだわらない」などのヒントを与え、時間はあまり取らない。</p> <p>○ 黒板やOHPを使用して説明すると良く分かることを教える。</p> <p>○ 個人で楽譜に記入させる。</p> <p>○ 各人が記入した記号をもとに話し合わせながら、表情を考えさせる。</p> <p>○ 考えた強弱記号を全員にプリントに記入させる。</p> <p>○ 班長を中心に全員で発表をしようと練習している班を値打ちづける。</p> <p>○ 発表できる勇気をほめる。</p> <p>○ 気持ちを傾けて聴くことの大切さを感じとらせる。</p> <p>○ 思ったことを歌で表現することのむつかしさを語る。できたときは賞賛する。</p> <p>○ 今までに指導してきたことを生徒に思い出させて、歌唱させる。</p> <p>○ 指名して発表させる。</p>

- イ 作品のイメージを旋律の繰り返しをもとにして歌唱表現の仕方を工夫することができる。
- ウ 各班とも、協力しながら、話し合ったり、練習ができたりする。
- エ 発表した班の演奏の意図を感じて、アドバイスすることができる。

### (7) 指導過程

前ページ閉じ込み

### (8) 授業の結果

実際の授業では「さくらさくら」の「はじめに」の例のような発表があった。

生徒は「さくらさくら」の魅力がわかってきたようだ。

授業の終わりに行なった「この作品が長い年月愛唱され継がれている理由を考えよう。」という問いには、次のように答えた。

- 日本人は桜が好き
- 季節を表す歌
- 琴の曲だった
- 歌詞がいい（簡単で覚えやすい）
- 旋律と歌詞があっている
- 曲が簡単で歌いやすい
- 日本独特の音階が使われている（5つの音でできている）
- 歌詞が3・3・7・7・7・7・3・3・5と調子がよく歌いやすい
- 勉強してわかったのだが、旋律のまとまりが何回も繰り返されていて覚えやすく歌いやすい

## 3 花の街

「花の街」は、後に生徒の発言例をあげておくが、題名や歌詞から生徒が豊かで多様なイメージをもつことができる優れた教材である。「歌えたら、歌ってごらん。」と言って、一度教師が歌って聞かせると、二度目にはもう口ずさむことができる、親しみやすく気持ち良く歌える教材でもある。その上、本格的に歌唱するには、内容的にも技術的にもかなり深く追究して表現を工夫しないと十分に気持ちを表現することが難しいやりがいのある教材でもある。

### (1) 作品の背景

團伊玖磨氏は彼の著書「花の街」の中で、次のようなことを述べられている。

「七色の谷を越えて 流れて行く風のリボン」  
で始まる江間章子さんの詩を受け取ってこの歌を作ったのは、太平洋戦争が終わって2年目、1947年の早春の事だった。 中略・・・

江間さんの詩を受け取った時、「花のまち」の標題を見て、詩人の想念は何と現実を超越するものなのかを最初に思った。現実は何處を見廻しても瓦礫の街だった。人々の心は荒み、さ、くれ立ち、焦げ臭い土埃を立てる風が吹き廻るこの環境の中で「花のまち」を歌う詩人の心に、僕は訝りさえ持ったのを今でも覚えている。然し、詩を読むうちに、訝りは消えた。そこには、詩人の祈りが立ち昇っていた。美しい街よ、甦えれ。やがて将来に人々の心を作る街よ、美しくあれ。江間さんの祈りに僕の祈りが合して、この歌は生まれた。

また、喜早哲氏の著書「日本の抒情歌」の中で、江間章子さんは次のように述べられている。

「NHKの婦人の時間で、あの時は確か担当が江上フジさんの時でした。何か夢を与えるような歌を、と頼まれました。あのころは不定期に歌を作っては流していたようです。あの街のモデルはどこということはないんです。荒れ果てていた当時の日本を見ていた私には、マボロシの街を頭に思い浮かべて書いたのです。こうあってほしいという願望だったんです。」

同じ江間章子さんが、喜早哲氏の著書「うたのふるさと紀行」では、次のようにも述べられている。

「私はあの詩を書く時、神戸のまちを頭の中に思い浮かべて書いたのです。神戸へは行ったことはなかったのですが、乙女心に神戸というエキゾチックな街に憧れて書いたのですよ。」

一つはマボロシの街、もう一つは神戸の街と二つの異なった街を江間章子さんはモデルにして書いたと述べられているが、どちらにしても、日本の国が美しく甦えれという彼女の願いがよく表れていると考える。

江間章子さんは「〈夏の思い出〉その想いのゆくえ」宝文館出版という本の中で〈花の街〉について次のようなことを述べられている。長くなるが、参考になると思うので要約して載せておく。

詩〈花の街〉は、私には幻想の街、夢のまちであった。戦争が終わって、平和が訪れたという地上は瓦礫の山、いちめんの焼土に立って、思う存分肺いっぱい吸い込んだ〈平和〉という名の空気が私に見させてくれた夢が〈花の街〉であった。

名曲アルバムのフィルムにまず現れる南房総辺の菜の花が咲く風景ではこまるのである〈花の街〉だから、当然〈花〉がなければおかしいのだが、じつは、その花が手の届くところにあってはこまるのである。

ブーゲンビリアやハイビスカス・・・そうした花が中空に浮かんでいなければならない

い風景だった。・・中略・・

あの詩を書いた昭和二十六年のころは、私たちが立っている地上はまだ焼土、ブーゲンビリア、ハイビスカスなどという花は、絵か写真で観るだけのものだった。

・・中略・・

〈花の街〉の詩のなかで、「泣いていたよ／街の窓で・・」という1行も、焼土に佇つ、戦いに敗れた国の庶民の、住む家も、仕事も失った、途方にくれた悲しみの姿を映しているのだと、作者自身、当時を振り返って想う。

なお、同じ、資料に、「ここに載せた詩は、NHKの資料室に保存されているものをコピーしたものである。」と書かれている。現在、教科書で使用している歌詞は次の通りである。したがって、3番が「街の窓で」と「街の角で」の2通りの歌詞があることになる。「窓」と「角」の違いだけではあるが、イメージする情景はずいぶん違うので、留意しておきたい。

この作品については、「花のまち」團伊玖磨 「歌のふるさと紀行」喜早哲 「日本の抒情歌」喜早哲 「夏の思い出」その想いのゆくえ」江間章子等たくさんの著書が発行されている。

## (2) 「花の街」の歌詞を考える

### 1番

七色の谷を越えて  
流れて行く 風のリボン  
輪になって 輪になって  
駆けて行ったよ  
春よ春よと  
駆けて行ったよ

### 2番

美しい海を見たよ  
あふれていた 花の街よ  
輪になって 輪になって  
踊っていたよ  
春よ 春よと  
踊っていたよ

### 3番

すみれ色してた窓で  
泣いていたよ 街の角で  
輪になって 輪になって  
春の夕暮れ  
一人寂しく  
泣いていたよ

七色の谷を越えて 流れて行く風のリボン

虹に通じるものか、とても鮮やかな書き出しである。

七色の谷

花が咲き乱れ七色に見えるのだろうか。焦げ臭い土ほこりを立てる風が吹く現実の街と比較すると、この歌詞の理解が容易になると思われる。

山を越えてと書いてなくて、人が生活をしたり、動物が集まったりする水のある谷を越えてというところにも親しみを感じる。

流れて行く風のリボン

風には実態がない。風を温かいとか心地よいとか皮膚で感じる。松や建物などに当たる音によって感じる。梢が揺らぐのを見て感じる。花の甘い香りを匂いで感じる。七色の谷をわたる風の流れに含まれているいろいろな思いをリボンをたばねることで全て表現してしまう詩人の豊かな感性を、私は強く感じる。

輪になって 輪になって 駆けて行ったよ

春よ 春よと 駆けて行ったよ

ここでは輪になってが2回、春よが2回繰り返されている。音楽はどんどん広がっていく。同様に、この歌詞を読む一人ひとりがもつあこがれや願いがどんどん膨らんでいく。その輪は春であったり、平和であったり、子どもであったりするであろう。私には風のリボンの下で平和の象徴である子どもたちが、動物や野の草や木が、春を求めて、春とともにどんどんふえながらかけて行く風景がイメージされる。また、「駆けて行ったよ」と過去型が使われていることによって、いちまつのさびしさを感じる。かけて行った後の光景はどのようなものかと気にかかる。

2番は野や谷から美しい海の町に場面が移る。海の青や空の青に映える彩りの建物、街、花。街は花であふれている。そんな街で踊りを楽しんでいる幸せな人々。一番では子供などと書いたが、踊っているのは誰。1番より場面が限定されてくる。

3番は、1番、2番の憧れの世界と違って、そのころの現実が描かれていると作詞者自身が述べている。「泣いていたよ 街の角で」などは、ふと、現実の街を思ったときの気持ちがよく表されていると思う。私は、江間章子さんは現実の街を描いただけでなく、次のような街を思い描いたのではないかと想像した。春、泣くところにこの作品への親しみを感じる。

豊かで花があふれる平和な街。人は、それだけでは、幸せにはなれない。そんな街の中でそれぞれに異なった生活をおくる人々。幸せにひたるときもあろう。さびしく泣くときもあろう。街の中で、一人ひとりの人間が幸せとともにさびしさをも感じるができる心の豊かな人々のあふれる街。

私には、日本の街よ美しく甦れという詩人の願いがふくらみ、花の街を素敵に描けば、描くほど、作詞者は現実とのギャップを感じ、更に深く戦争の悲惨さや悲しさを感じたのではないかと思われる。私は、この歌詞から、優しさとともに悲しみを感じる。

### (3) 「花の街」が愛唱され続けている理由

この作品が愛唱され続けている理由を次のように考える。

- この曲のはじまりの「ソドレミ」という音程の旋律に、日本人は昔から特別に親しみを感じている。曲も、例えば「茶摘み」「浜辺の歌」等、数えればきりが無いほどある。
- 人々に夢をあたえるような歌詞になっている。特に、敗戦後のすさんだ心をもった人々には、歓迎されたいだろうと想像される。
- 当時としてはあか抜けたしゃれた和音がいたるところに使われ、さわやかな気持ちを人々に与えたと思われる。特に、前奏の和音の使われ方は当時としては新鮮であった。作品全体も明るく現在でも人々に親しみを感じさせている。

☆ 前奏のはじめの4小節はそのまま、ゼクエンツとなって4度上のBフラット上に繰り返される。

☆ 減七の和音、増和音、借用和音、一時的な二短調への転調など。

- 伴奏もしゃれた表現が随所に見られ、この作品のもつあこがれとか幻想的な雰囲気は自然に醸し出すことに成功している。特に♪♪♪のシンコーションのリズムが曲の進行を進める上で大切な役割をはたしている。
- 作品は形式にこだわらず言葉を大切に作曲している。しかし、「輪になって駆けていたよ」から「春よ春よと駆けて行ったよ」の箇所は2・2・4小節とセオリーを踏んだ作曲法が使われているなど、自由さと形式感がほど良く調和していて、親しみやすく歌いやすくなっている。

☆ 形式はABの通作風な2部形式である。各フレーズは歌詞の内容を自然に歌いあげるために、小節数にこだわらず自由に作られている。また、各フレーズは問いかけと答えの形に上手にまとめられていたり、作品全体が起承転結の形でまとめられていたりするなど、自由につくられた部分と形式的にかっちりつくられた部分がうまく調和している。

- 旋律は言葉の抑揚が生かされ歌いやすい。また、曲のヤマがはっきりして歌唱することに喜び（満足感）を覚えるように作曲されている。
- フレーズは問いと（以後Qと呼ぶ）答え（以後Aと呼ぶ）の形でつくられていて、まとまりを感じさせるのに役だっている。歌う人や聴く人に安定感を与えている。  
1フレーズ Q 4 + A 5                      2フレーズ Q 2 + 2 + 4    A 5
- 各フレーズは「出発感」「連続感」「段落感」をもっており、まとまりがある。曲がスムーズに流れている。
- すべてのフレーズは♪♪♪のリズムで始まっていて、統一感を作品に与えている。また、言葉の抑揚と調和しており、自然で歌いやすくなっている。
- 言葉を旋律やリズムに自然に生かそうとしたためであろうか、付点音符がこの作品にはない。8分音符と4分音符と少しの2分音符だけでできていることが、人々の心に自然に受け入れられた大きな理由になっていると思われる。
- リズムを1小節ごとに分けて分類してみると、次の6つで曲全体ができている。このことが、フレーズごとの小節数が一定でないこの作品に統一感を与え、親しみやすさをもたらしている。

- ① ♩♪♪♪                      ② ♩♪♪♪                      ③ ♩♪♪
- ④ ♩                              ⑤ ♩ ♩♪                      ⑥ ♩ ♩

♪♪♪♪/♪♪♪♪/ ♩ ♩♪♪/ ♩♪♪♪♪/♪♪♪♪ / ♩♪♪♪/ ♩ ♩ / ♩♪♪♪/ ♩♪♪♪ / ♩♪♪♪/ ♩♪♪♪ / ♩ ♩

- 言葉のフレーズが旋律のフレーズになるように考えて作曲されているので、自然で歌いやすい。
- 音域も9度と狭く、誰にでも歌えるようになっている。
- 旋律のまとまりの最後の音符が次の最初の音符になるように工夫されているので、（音のしりとり効果）自然で歌いやすい。

#### (4) 「花の街」で学びとらせたいことと学びとらせる方法

「花の街」で一番学びとらせたいことは、「輪になって」からフレーズごとに「かけていったよ」まで盛り上がり、ついには曲のヤマにいたる旋律を、気持ちの高まりとともに感じとらせてたっぷり歌わせ、歌うことの醍醐味を感じとらせることである。特に、「かけていったよ」の「よ」は、生徒に、そのまま充実した音でたっぷりのばして歌わせたり、最後を消えるようにディクレッシェンドして歌わせたりさせながら、この曲の雰囲気表現するにはどちらがふさわしいか判断させながら、歌い込ませたい。また、それと関連して、次の「春よ春よと駆けていったよ」の出だしが遅くならないように正確なリズムで、しかも、終わりのフレーズらしくおちついた表現になるように歌わせたい。

また、歌い込ませることによって、旋律線の動き、和音のしゃれた使われ方、言葉の抑揚と旋律の自然なつながり、フレーズの小節数のふぞろいとそれをまとめるように自然に流れるリズムフレーズの関係のおもしろさ等、様々なことを感覚的にわからせ、感得させたい。

指導にあたっては次のような事項に気をつけて、この作品の良さを感じとらせ、歌唱表現を工夫させたい。

- 「花の街」という題名からイメージするものを発表させる

この作品の指導にあたっては、まず、生徒一人ひとりに『「花の街」という題がついているが、どのような花が咲く、どのような街を想像しますか。』と尋ね、一人ひとりがつ「花の街」に対するイメージを発表させる。

この作品が生まれたいきさつやモデルの街についての資料は配布するが、生徒一人ひとりのもつ花の街についてのイメージを大切にしたい。

- 歌詞のイメージを出し合わせることによって、作品へのイメージをふくらませる

歌詞については好きなどころを、しゃれた表現や気になる表現などを参考にして探がさせながら、詩人の感性の豊かさを感じとらせたい。3番の歌詞については、この作品ができた時代の街の様子や作詞者の思いなどについてのプリントを配付するとともに、簡単に説明をする。このとき、学習する生徒が1年生ということを考慮して、理屈っぽくならないようにしたい。

- 旋律線の動きやフレーズのまとまりを感じさせながら歌唱表現させる。
- この作品の魅力に「この作品が40年以上も愛唱され続けている理由を授業を振り返りながらもう一度考えさせる」ことによって、迫らせる。

## (5) 「花の街」の学習プリント

### 「花の街」学習プリント

1年( )組NO・( ) ( )

1 「花の街」は昭和22年にNHKの「婦人の時間」のために作曲され大好評を得、当時の人々に愛唱されました。そして、40年以上たった現在も日本中の人々に愛唱され続けています。この作品が日本中の人々になぜ愛唱され続けたかその秘密にせまらしましょう。(下から2つ選択)

#### ④ 歌詞の意味

● 「花の街」という題名から、どのような花の咲く、どのような街を想像しますか。

● 歌詞で、しゃれているなど感じるところはどこですか。(理由も)

☆

☆

#### ◇ 歌詞と言葉

言葉の抑揚を生かして作曲されているところはどこですか。

☆

☆

☆

3 曲のヤマはどこですか。ヤマをつくるためにどのような工夫がされていますか。

4 旋律で素敵だと思ったこと、気がついたことを2つ書きなさい。その理由も書きなさい。

\* 「花の街」が作曲された当時の日本の様子や作品が生まれたいきさつをプリントで調べよう。

\* 感じたことを自由に書こう。(絵も可)

2 「花の街」を4つの旋律のまとまりに分けなさい。また、4つの旋律のまとまりを、問いかけの部分Qと答の部分Aに区別しなさい。

5 「花の街」を学習してきました。あなたが感じているこの曲の魅力やこの作品が愛唱され続けた理由等についてを自由に書いてください。

## (6) 教師の働きかけに対する生徒の反応

次の発言は、ある学級で『「花の街」の歌詞の中から好きなところを一つ選び、黒板の歌詞の横に名札のついたカードをはりなさい。』と指示して、生徒に理由を尋ねたときの答の要約である。大人では考えつかないような発想があり、授業をする私を驚かせた。

七色の谷を越えて流れていく風のリボン

「風のリボンと7色の谷が響きあって美しい。」「風のリボンはおもしろい。感じ方と表現の仕方がよい。」「あふれてた花の街、きれいな花が街をおおうようにあふれて咲いている。」「風のリボンがよくわからない。」

七色の谷をこえて

「色が好き。」「本当にはないもの、虹を想像する。」「苦しいことを乗り越えた感じ(戦争)。」「空想の世界。」

輪になって、輪になって

「戦争が終わった。仲良く生きていこうという願い。」

かけていったよ

「戦争が遠くにかけていった。」

あふれていた花の街を

「食べ物がないのにこんなことが書かれている。複雑な気持ち。」「戦争が終わってよかった。」

すみれ色してた窓で

「何となく色が好き。」「やさしい感じ。「静かな場所。」「1、2番は空想の世界である。3番は違うのではないか。雰囲気が好き。」

このことから、この曲は題名や歌詞から、豊かで多様なイメージをもつことができる優れた教材だということがわかった。

「この曲は40年以上も愛唱され続けている。旋律を中心にこの曲の良さを考えよう。」という問いに、生徒は次のように答えた。

「言葉と旋律があっている。」「『駆けて行ったよ』のところなど言葉の意味が旋律に表されている。」「メロディが自然」「伴奏の14小節と15小節が良い。」「輪になって、輪になって、と盛り上がり、ヤマがある。」「♪でなく、♫がある。」「旋律のまとまりの終わりの音が次の旋律のはじめの音になる。しりとりのようなようだ。」等。

## 4 赤とんぼ

教育実習生がこの作品の歌詞を指導していたときのことである。

「1番の歌詞からどんな情景が想像できますか。」という教師の問いに、ほとんどの生徒は「子どもが赤とんぼを追いかけている。」と、答えた。すると、一人の女の子が立って、次のように発言をした。「母から聞いた話だけれども、背中に負われて赤とんぼを見ていたということです。」私は、この「母から聞いた話だけれども」と、いう言葉に、老若男女、誰にも親しまれ、長い年月歌い継がれてきたこの曲の一面を見るような思いがした。

### (1) 作品の背景

「赤とんぼ」は露風が函館のトラピスト修道院にいた三十三歳の時に詠んでいる。彼は兵庫県竜野市に生まれた。この歌は7歳の時にお母さんと生き別れした露風にとって、幼い頃に別れた母への恋しさと、故郷竜野への思いをはせた望郷の詩でもあったようである。

そして、真っ赤な夕焼けに染まったふるさと。精霊とんぼともいわれ、お盆の頃秋風とともに空に現れる赤とんぼ。赤い桑の実。三木露風の故郷への思いは山田耕筰の親しみやすいメロディにのって今も、多くの人に故郷を思い出させている。

喜早哲氏は、「うたのふるさと紀行」の中で、この作品について次のように述べている。

童謡研究家や世の識者に、「赤とんぼ」は詩的にすぐれていないとか、アクセントが間違いだらけとかいわれているが、私達ステージに立つ人間として感じることは、これほど日本人に好まれている歌は、他にないのではないかということである。これこそ老若男女の別なく歌えるし、また、この曲ほどたくさんの合唱団がそれぞれの編曲で歌っている例も珍しい。歌いやすく、編曲しやすく、歌うことによって自己陶醉しやすい歌、即ち名曲であると思う。

音楽鑑賞教育6月号通巻213号の共通教材ノート山田耕筰の歌曲「赤とんぼ」で、後藤暢子さんは次のように書いている。

山田耕筰の童謡「赤とんぼ」は、三木露風がもともと子どものための雑誌「櫛の実」の大正10年8月号に寄稿した「赤蜻蛉」の詩をテキストにしている。その古い雑誌を見ると、見開き2ページにわたって露風の詩が掲載され、角隠をつけた花嫁姿のねえやが老爺に手綱を取られた馬の背に揺られつつ山を越えていく挿画が描かれている。山田耕筰の童謡があまりに有名になった結果、三木露風の初出の詩は忘れられてしまった感がある。だが、じつは露風の初出の詩と今うたわれている山田の童謡の歌詞は少々ちがうのである。

ここに露風原詩を引用すると

#### 赤蜻蛉

夕焼、小焼の、	山の畑の、	一五で、ねえやは	夕やけ、こやけの、
山の空、	桑の実を、	嫁に行き、	赤とんぼ、
負われて見たのは、	小籠に摘んだは、	お里のたよりも	とまってゐるよ、
まぼろしか。	いつの日か。	絶えはてた。	竿の先。

・・・中略・・・

露風の詩には、時間の流れが読み込まれている。山の空を「負われて見た」幼い日、桑の実を自分の手で「小籠に摘んだ」少年の日、「十五」の年に子守のねえやは去って行った、そして竿の先にとまった赤とんぼを眺めている今。詩人の回想のなかで、時間は遠い過去から現在へと流れる。その時間の流れにそって、記憶は「まぼろしか」「いつの日か」「一五で」としだいに確かなものとなる。また、第1節は「山の空」、第2節は「山の畑の」であり、第3節では（詩句には表されてはいないが）その山を越えてねえやお嫁に行ったのであろう。つまり詩人の回想は、故郷の山をめぐる展開されている。

後略・・・

また、後藤さんは、なぜ山田耕筰は時間の流れと場の設定を曖昧にするような改変を行ったかというところで、『山田は日本語のアクセントがシラブルの強弱でなく高低（すなわち抑揚）であることに気づき、歌曲や童謡を作曲するさいに努めて日本語のその自然な抑揚を生かそうとした。』と書いている。『作曲家の團伊玖磨氏がいちど山田耕筰に向

かって、「先生の赤とんぼという抑揚は標準語の抑揚とちがうのではないか。」と尋ねた。「江戸っ子の抑揚は歌のとおりだ！」というのがその答えだったと、氏がある随筆に書いている。」とも書いている。

また、江戸時代にはこのように発音したと池田弥三郎氏から聞いたことがあると「歌のふるさと紀行」のなかで喜早哲氏も書いている。

この他、「童謡でてこい」阪田寛夫 「母と子のうた」長田暁二 「歌をたずねて」毎日新聞社 「日本の抒情歌」喜早哲 ふるさとの歌19 「赤とんぼ」橋岡武中国新聞他、たくさんの文献が雑誌や新聞などに掲載されている。

## (2) 「赤とんぼ」の歌詞を考える

1番は夕焼けだけでなく小焼があることにより、子どもたちの遊び声が聞こえ、田舎の人々の生活や夕方の風景がイメージされてくる。多くの日本人がイメージするふるさとは、このような情景ではなかろうか。そんな情景のなかで、ねえやの背中に負われて赤とんぼを見たのはいつだったろうか。この歌が愛唱されている理由には、夕焼けや赤とんぼなど、歌詞に散りばめられた言葉から、我々日本人誰もがその人固有の思いやなつかしい情景を思い浮かべることができることがあげられよう。例えば、次のような情景などである。

☆ 赤く染まった空をたかさんのとんぼが飛んでいる。それが逆光にシルエットのように黒く映し出されるような風景。

☆ 遊び疲れて家に帰ろうとしたとき見られる、人も家も風景までも包み込むような夕焼け等。

私たちの住んでいる山口県の田舎では、赤とんぼを精霊とんぼと呼んでいる。8月のお盆のお墓参り頃、いつの間にか現れ、先祖のことを思い出させたり、いつのまにか秋が来たなと感じさせたりする。そして、そのころから桑の実が赤く色づき始める。

2番はねえやに負われた幼年時代から、桑の実を小籠に自分で摘んだ少年時代へと思い出は移っていく。桑といえば、そのころ農家は必ずといっていいほど蚕を飼っていた。貧しかった時代、衣類を自分で調達したり、反物を商人に売って現金を得ることは農家の大切な生活の手段であり、また、それは生活そのものであったに違いない。桑の葉を取ってきて、屋根裏のお蚕棚で蚕を飼い、糸を紡ぎ、反物を織る。そんな生活の思い出とともに摘んで食べた桑の実のあまざっぱい味は忘れられないものであったろうと思われる。そして、このような情景こそが多くのの人々にふるさとを思い出させるのではないだろうか。

3番では十五でねえやが嫁に行く。そのことは、貧しさの中、幼くして奉公に出る風習などとともにごくあたりまえのことだった。しかし、ねえやの嫁に行った十五はかぞえ年であり、この教材を学習する中学生とほぼ同じ年齢である。昔のお嫁さんは、朝早くから夜遅くまで働いていた。若くして嫁にいき、つらい生活に耐えることはこの時代の多くの婦人の共通の体験であった。3番の歌詞がこの歌詞の中心である。自分を育ててくれたね

えやが嫁に行き、ふと気がつく、ねえやのところに、来ていた便りが、来なくなっていた。便りにねえやがいなくなった気持ちを託す感覚がおもしろいと思う。また、私は次のような想像もしてみた。

ねえやは、作詞者の家を里のように思い、そこから嫁に行った。はじめのうちは作詞者の家につらいという便りもあったが、だんだんと子どもが産まれたり、仕事に慣れたりして、嫁いでいった家でなくてはならない人になっていった。そのうち、便りもだんだん来なくなってきた。そのことに、ねえやは元気にやっているという安心した気持ちと、とうとう僕のねえやでなくなったという寂しさのいりまじった複雑な気持ちをもったのではないかと思う。

露風自身が、母が忘れられず、後年母の誕生日には毎年のように母のもとを訪れたことや「赤とんぼ」の詩も「おかあさんにささげたんですよ」と語っていたと「ふるさとのうた」中国新聞社で橋岡武解説員が書いている。ねえやは、7歳のときに離縁となって生き別れた母親が、モデルではないか。

4番では、昔とまったく同じ風景のなかで、竿のさきにとまっている赤とんぼを見て、自分の愛した母やねえやを思いだし、感傷にひたっている情景がイメージされる。このように「風景は同じだが、それを一緒に見た大切な人は今はいない」という情景は日本人の心を揺さぶった。万葉の昔から、「大切な人と昔見た風景をその人が亡くなった今、一人で見る切ない気持ち」や「荒城の月のように月は今も昔も変わらないのに、昔の栄華はどこへいったのだろう」といった無常観」等を、日本人は敏感に感じて、歌にした。懐かしさや寂しさのいりまじった気持ちで、竿の先にとまった赤とんぼを見ているこの情景も、我々の心情に何かを訴えてくる。

竿の先の赤とんぼが過去の思い出と現在を結んでいるのではないだろうか。

この歌詞は現在ある多くの歌詞と違って1番、2番、3番、4番が様々な要素でもって構成されている。時間、言葉、形式等、様々な視点からじっくり味わってみたい歌詞である。

### (3) 作品の魅力

この作品が60年以上も歌い継がれ、現代もなお、子どもからお年寄りまで多くの人々に愛唱されている秘密を、重複するところもあるが述べてみよう。

○ この曲が歌い継がれている一番大きな理由は旋律の美しさ、魅力である。わずか8小節の旋律にもかかわらず、それを感じさせない内容の深さや魅力をもち、さらに覚えやすく、ふと口ずさみたくなるような親しみやすさも、あわせてもっている。つまり、この作品は内容の深さからくる魅力とどんな人にも歌われるという大衆性を合わせてもっているのである。だから、小学生が歌えば、小学生なりにいろいろなことを感じとりながら満足して歌えるし、専門家は専門家で、その力量に応じて作品の内容と演奏方法をいくらでも追究でき、満足して歌うことができるのである。

また、この曲が歌いやすいという理由の一つに、前述した、言葉の抑揚が自然に旋律

に反映されているということもあげられる。

- 山田耕筰は西洋音楽の和声等の技術を完璧に使用して作曲した日本最初の作曲家である。この作品も変ホ長調でがっちりと作曲されており、安定した響きの良い作品に仕上がっている。しかも、旋律がファとシのないド、レ、ミ、ソ、ラの5つの音でできており、日本的な情緒が感じられる親しみやすい作品にもなっている。日本的な親しみやすさと西欧の作曲技法がうまく調和した作品である。
- 日本独特の七五調または八五調のリズムで歌詞ができていますので、口調がよく歌いやすい。歌詞のまとまりが旋律のフレーズと一致しているのが自然で歌いやすい。
- ふるさとを思う作詞者の気持ちが歌詞の内容によく表れている。また、それらが人々に望郷の思いをかきたてる。
- 日本語の抑揚が旋律に生かされており、自然で歌いやすくなっている。
- ゆっくりしたテンポで、暗い雰囲気のある歌詞だが、踊りを思わせる4分の3拍子を選択することで、曲が暗くじめじめした感じになるのを防いでいる。
- 子守のねえやのところに来ていた便りが、こなくなった。便りにねえやもいなくなったことを表現するといったところに作詞者の感性や親しみを感じる。

#### (4) 「赤とんぼ」で学びとらせたいことと学びとらせる方法

「赤とんぼ」で生徒に一番学びとらせたいことは、歌詞の抑揚やフレーズ感を生かすように表情を工夫して歌唱させ、わずか8小節のこの旋律がどんなに素晴らしい表情を持っているか、学級全員に体験させ、感動させることである。そのために、次のことに留意して歌唱表現の工夫に取り組ませたい。

言葉の抑揚（特に助詞）や歌詞の意味がわかるように気をつけて歌わせる。

特に、4小節目と7・8小節のフレーズの終わりを感じて、ディクレッシェンドを生かしたい。なぜなら、4小節目の赤とんぼの「ぼ」や8小節目のいつの日かの「か」を、すーっと胸に（心に）帰っていくようにディクレッシェンドさせ、日本の歌曲特有の情感を表現することによって、この作品の魅力を感じとらせることができるからである。また、ディクレッシェンドを生かすにはディクレッシェンドができるだけの音量がいることやそのためにはクレッシェンドを十分にすることが必要であることも体験させたい。

フレーズのまとまりを感じ、音符の高低の変化にあわせて、クレッシェンドやディクレッシェンドの十分にきいた歌唱表現をすることこそ、この曲にふさわしい演奏の仕方だと考える。

また、生徒を、主体的に表現活動に取り組むようにさせるには、生徒に興味・関心を持たせることが大切である。

そのためには、まず、生徒は、この作品についてよく知っていると思っているので、はじめに、「おやっ。どうして。」と、生徒を驚かせるような、この作品の本質を見せることが大切である。私の場合は、歌詞の意味を考えさせたり、説明したりして、生徒の作品のイメージを変えることから「この曲は知っていると思っていたが、まだまだ知らないことがあるぞ。」と、いう驚きを与えようと心がけている。

具体的には、1番の歌詞を取り上げて、赤とんぼを追いかけいていると思っている生徒に、漢字の「負う」という字に目をつけさせて、ねえやの背中に負われて赤とんぼを見て

いる情景であることをわからせること等である。

また、桑の実や蚕の話、主人公は中学1・2年生と同じ年（かぞえ年）であること、嫁について苦勞する当時の様子等、作品の背景を説明することが作品の理解には不可欠である。そのころの生活の様子を簡単に説明することによって、これらの作品を身近に感じさせ、授業に興味を持たせたい。

次に、歌詞の情景を考え、作品のイメージをつかんだ後、自分達の演奏を「どのようになおしたらもっと良くなるか」自分達の演奏を自己評価させ、意見をださせながら、この曲のイメージを歌唱表現させる。

そして、生徒の表現が行き詰まったとき、教師が40人で歌うことを意識しながら、表情豊かにゆっくりと模範演奏することによって、生徒の、狭くて浅いイメージを打ち破り、「赤とんぼ」は表情をつけて歌うと、歌う者も聴く者も表情のすごさに感動することができるという体験をさせたい。

この体験により、生徒は、自分達が考えていたことを、40人で表現すれば、どのように素晴らしいか、また、この作品がいかに表情豊かな曲であるか感じとれるのである。

次に、出された意見をもとに、「なぜ、この歌詞が我々日本人の心を打つことができるのか。また、なぜ、たった8小節のこの曲が、我々の心をとらえることができるのか。その秘密に挑戦してみよう。」と語りかけ、旋律と歌詞の意味からこの作品を追究させていきたい。

その他、次のようなことを指導する。

- 歌詞がわかるように言葉のまとまりと歌詞の意味を考えさせながら歌わせたいと考える。
- 繰り返し歌わせることにより、音楽的な感覚が自然に身につくようにさせたいと考える。
- 変ホ長調の音階を教えるとともに、響きの良い長調の和音でこの曲がつくられていることを感じとらせる。その上で、「この作品の和音は catchy した変ホ長調でできているのに日本の歌という感じがする。なぜだろう。旋律に何か秘密はないか。」と、問いかけながら、旋律が5つの音でできていることを発見させたい。5つの音でできていることがこの曲の雰囲気をつくっている大切な要素であることを感得させたい。

(5) 指導計画 2時間

	学 習 内 容	主 眼	追 究 を 支 える 手 だ て
1	○歌詞の情景の把握と歌唱表現の工夫 赤とんぼの鑑賞	○歌詞の学習で感じた曲のイメージをフレーズを大切にしたり、クレッシェンドやディクレッシェンドを工夫をしたりしながら、歌唱表現に生かすことができる。	○「1番の歌詞の情景は赤とんぼを追いかけるのか、背中に負われて見ているのか」「何番が過去で、何番が現在か」等と問いかけることにより、情景をイメージさせる。
2	○言葉の抑揚や語感を生かした歌唱表現の工夫と「赤とんぼ」の暗唱	○ファ、シぬきの5音で旋律が構成されていること、言葉の抑揚が旋律に上手に生かされていること等、この作品の魅力を感じとりながら、歌うことができる。	○「赤とんぼ」の魅力は旋律、旋律と言葉の関係言葉のまとまりと旋律のまとまり等、様々な角度から生徒に意見をださせて、追究させる。

(6) 指導過程

学 習 内 容	教 師 の 働 き かけ	予 想 さ れ る 生 徒 の 反 応	教 師 の 対 応
1 既習曲の歌唱	1 教師のピアノの伴奏のあわせて「赤い川の谷間」や「小さな木の美」等の曲を表情豊かに歌わせる。	○ピアノの伴奏のリズムに乗って気持ちよく歌うことができる。 ○初めは、意欲のない生徒もいるが、3曲目くらいにはほとんどの生徒が気持ちよめて歌えるようになる。	○何も指示しないのに2部合唱で歌ったり、表情を上手につけて歌ったりすること等を肯定的に評価する。 ○自由な雰囲気の中で歌わせる。 ○クラス全員で表現するという意図をもたせる。 ○でてこないものについては教師が提示する。 ○個人で2つ書かせ、発表させる。 ○時間をかけない。
2 「赤とんぼ」の魅力の追究 追究の方法 歌詞の理解	2 この曲が長い年月愛唱され続けた理由を追究しながら、「赤とんぼ」の魅力を探るという課題を示す。 「どのようにしたらこの曲の魅力をせまれるか考えながら歌わせる。」 3 歌詞を朗読させ、1番の情景を発表させる。	○生徒は、次のような事項を調べると答える。 ア 歌詞 イ 和音 ウ 旋律 エ 伴奏 オ リズム カ フレーズ キ 形式 ク 作詞者 ケ 作曲家等 ○「タ万子どもが赤とんぼを追いかけている」情景をイメージする生徒と「子どもが背中に負われて赤とんぼ見ている」情景をイメージする生徒がいると予想される。しかし、「赤とんぼを追いかける」生徒が多いと予想される。	○赤とんぼを追いかけることと字練習全員が答えるときには「負われる」という字が書いてあって「追われる」ではないことを助言する。 ○両方の答えがでた場合は、立場を取らせて、字練習で話し合わせる。 ○2番から4番までは教師が情景については、教師が説明する。 ○1番が現在または過去であるという視点は聞くが、どちらが正しいという判定はしない。 ○そのクラスの決めた速度を尊重し、その速度にあった歌唱表現を工夫させる。
3 歌詞の内容にあつた歌唱表現の工夫 速度 フレーズ	4 何番の歌詞が過去で、何番の歌詞が現在を表しているかを考えさせ、発表させる。 5 歌詞の情景にふさわしい速度を、=60~120程度まで実際に何種類か歌わせ、決めさせる。	○1・2・3番が過去で、4番が現在という意見と1・4番が現在で2・3番が過去の2つの意見がある。 ○生徒は、=60~72程度のゆつくりしたテンポを過半数が多数を占める。もつとゆつくりした速度を選択する生徒も小數いる。 ○2小節ごとに旋律がまとまると考える生徒はほとんどいない。 ○4小節ごとに歌いやすいので多数だが、全体が一まとまりと考える生徒もいる。	○息づきも意識させる。 ○字練習を2つのグループに分け、実際に2小節ごと、4小節ごとに交互に歌わせて確かめさせる。 ○言葉のまとまりにも注意を向けさせる。 ○自分に向かって歌いかけるのではなく、字練習のみんなで歌い合わせるという意図をもたせる。 ○フレーズの終わりの人の口元に消えるように返っていくディクレッシェンドが日本の歌の寂しき・なつかしさを表現する有効な方法であること、そのためには、音が高くなるときにクレッシェンドして音量を確保する必要があることを説明する。 ○生徒の考えを、実際に歌わせ、確かめさせながら授業を展開する。 ○良くなった点を肯定的に評価する。 ○次時の予告をする。
言葉の抑揚 クレッシェンドとディクレッシェンド	7 「負われて見たのは いつの日か」の部分を取り上げ、歌詞のイメージにふさわしい表現の仕方を考えさせる。	○瞬々しく歌う生徒が多い。 ○音が高くなれば自然にクレッシェンドする生徒が多い。 ○意識してクレッシェンドしたり、上手に表現できる生徒も小數だがいる。 ○言葉の意味を考えて、「負われて、見たのは、いつの日か」をわかるように歌うことはむづかしい。 ○「いつの日か」の「か」をディクレッシェンドで上手に歌うことがむづかしくてできない。	
4 仕上げの歌唱練習	8 クレッシェンド、ディクレッシェンドと言葉の抑揚に気をつけて歌唱練習をさせる。	○フレーズ感がでて、かなり内面的な表現ができるようになる。言葉の抑揚はなかなか上手に歌唱表現ができない。	

## 5 終わりに

「赤とんぼ」は4番が現在で、123番が過去の思い出ということを経験した後、現在と過去をどのように歌い分けたいかという例として、授業の最後に、123番はクレッシェンド・ディクレッシェンドの表情をたっぷりつけて歌い、4番は、小さく、表情を極端に殺して歌わせて授業を終わった。二人の生徒が、「先生、1番、2番、3番は、表情を殺して何か遠くを見るように小さく歌い、4番は、現在だから、表情をつけて歌う方がいいのではないですか。反対です。」と、私に、訴えてきた。

私は、「生徒達が、この曲を主体的に表現しようとしてきたな。」と感じた。

共通教材に取り組もうと資料を集め出してから、確かに生徒のこれらの曲に対する取り組みが年々、主体的になっていくように感じる。

最初、私同様、教育実習生や若い先生方が、「歌唱共通教材をどのように研究したらいいか」、「教材をどのように解釈して、どのように生徒に働きかけたらいいか」、困っているのを見て、歌唱共通教材の研究が附属学校にいる私の使命だと考え、はじめた試みであるが、作品の背景を調べたり、歌詞から様々なイメージを思い浮かべたり、作品の魅力の秘密を追究したりすることによって、いつの間にか、私自身がこれらの曲が好きになっていた。それとともに、生徒もこれらの曲のよさがわかってくるようになったようである。

これらの資料や研究したことを今後の授業に役立ててゆきたい。

本紀要には1年生3曲分しか記載できなかったが、今後2年生、3年生の教材についても研究を進めていきたい。

なお、この研究に協力して下さったたくさんの先生方、図書館の方に厚くお礼申し上げます。

### 参考文献

音楽鑑賞教育 6月号通巻213号「赤とんぼ」 共通教材ノート 後藤暢子 財団法人

音楽鑑賞教育振興会

「好きな歌・嫌いな歌」 團伊玖磨 読売新聞社

中学校指導書 音楽編 文部省 教育芸術社

「日本の唱歌（上）明治篇」 金田一春彦・安西愛子編 講談社文庫

Favorite Songs Taught in Japanese Schools (Essay and Translations by Itiro Nakano) sakura sakura (arranged by Masaru Ukon) The Japan Times

「花のまち」（重ねてパイプのけむり） 團伊玖磨 朝日文庫

「歌のふるさと紀行」 喜早 哲 日本放送出版協会

「日本の抒情歌」 喜早 哲 誠文堂新光社

「く夏の思い出」その想いのゆくえ」 江間章子 宝文館出版

花ごよみ 日本の花と歌 「赤とんぼ」 悠 1989、10月号 田中澄江 ぎょうせい

「童謡でてこい」 阪田寛夫 河出書房新社

「母と子のうた」 100選 長田暁二 時事通信社

「歌をたずねて」 毎日新聞社

ふるさとの歌 19 「赤とんぼ」 橋岡 武 中国新聞